

東京電力福島第一原発事故後、福島県双葉町から坂井市丸岡町に避難していた川崎葉子さん(65)が今月末に福島県へ帰る。住み慣れた家ではなく、五十<sup>キ</sup>離れたいわき市に構えた新居。「戻ったところで昔に戻るわけじゃない。福井の人は、原発の存在を自分のこととして考えて」と呼び掛ける。  
(鈴木あや、松原育江)

# 避難の女性

# 県民に訴え

## 福島の川崎さん



福島県に帰るのを控え、精神的に被災地の現状を訴える川崎葉子さん(65) 鯖江市文化センターで

事故直後、知り合いのいた坂井市に家族四人で避難した川崎さん。県内の避難者のネットワーク「FFFFの会」をつくり、講演や著書で被災の体験を伝えるなど活発に動いてきた。「どこでもすぐ友だちができて」と笑顔を見せるが、福島県外での生活は五年が限度だと、避難当初から考え

ていた。夫は本家の長男。双葉町には先祖代々守ってきた土地や墓があり、自宅は親族のよりどころだった。川崎さんも近くの富岡町に生まれ、雪のない福島の気候が体に合う。何より学習塾や日本舞踊など教室を運営し、顔も広かった分、福島県には自分の帰還を待って

いる人がいた。ただ、双葉町の自宅は福島第一原発から三<sup>キ</sup>ほどの帰還困難区域で、汚染土などを保管する中間貯蔵施設の予定地になっている。今は許可を得て防護服を着れば入れるが、国に土地を売れば近いうち、それもかなわなくなる。ネズミのふんだらけになった家の中は、

もつじいも感じない。最初「帰りたい」だった思いは「帰れない」に。双葉町での人々のつながりは元通りになることはなく「自宅には帰らない」との意志になった。いわき市は高校時代を過ごし、仕事でも足を運ぶことが多かったため、知り合いも多い。双葉町の役場機

能があることも理由に、新たな住まいに選んだ。「復興とは元に戻ることでしょなくて、新たなコミュニティをつくること」。従来のいわき市民と、避難して移住した人との懸け橋になろうと考えている。

全国で最も原発が集中する福井。住民には「行政の言つとおりではなく、自分

のこととして考えて」と訴える。福島では事故が起るまで、すぐ近くの原発は「絶対に安全」と聞き疑わなかった。「福井の原発で事故があれば、真冬の避難で凍死しないのか。複合災害で道路もつぶれていたら、避難できないんじゃないか」。事故前にはなかった不安が、今では次々と浮かぶ。福島に帰るのを控え、今も福井県内で精力的に講演などをこなす。六日は鯖江市であったチャリティコンサートトークセッションに参加し「福井に避難して来て、たくさんの方が励ましてくれた。私たちが体験したことを忘れないで語り継いでいき、それを聞いたみなさんが自分や地域、国の問題として考えてほしい」と訴えた。